

# フィリピンとの掛け橋

第6号 日本聖公会九州教区宣教局フィリピン協働委員会発行

2004年4月11日

## ワークキャンプ特集



3月2日・火～9日・火

## 教区から9名を派遣

九州教区は、協働関係にあるフィリピン中央教区へ、9名を派遣して、同教区にある2つの教会のペンキ塗りを中心としたワークキャンプが行われました。

すでに教区報4月号に概略は報告されていますが、参加者の感想文や詳しい日程、写真などを掲載して、支援をくださった教区の皆さんに報告します。編集の都合で、感想文をすべてページの最初に置けなかったことや、写真に偏りがあることはご容赦ください。

(編集担当・小林司祭)

**参加者** 小林史明司祭(団長・熊本聖三一教会牧師)、

牛島幹夫司祭(副団長・厳原聖ヨハネ教会牧師)、  
(以下五十音順) 家入貴裕(福岡教会)、沖本恭子(久留米聖公会教会)、野田晃助(大牟田聖マリヤ教会)、山口皓平(佐世保復活教会)、山崎洋(戸畑聖アンデレ教会)、山本尚生(久留米聖公会教会)、和田有加(福岡教会)。

## キャンプ日程

3月2日・火

午前10時50分福岡空港発、中華航空で台湾乗換え、午後3時50分(現地時間・日本より1時間遅れている)マニラ空港着。夜、教区事務所で歓迎会、夕食会。

3日・水

朝食後、ミンドロ島グループ(以下MG)とコギオグループ(以下CG)に分かれて派遣。MGは夕方ミンドロ島に到着。

CGは1時間で聖グレゴリー教会に到着し、午前中から作業開始。

4日・木

MGは2時過ぎに作業終了。CGは終日作業。

5日・金

MGは近隣集落訪問。CGは終日作業。

6日・土

MGは島を出て、午後レメリーの教会訪問。レオン司祭宅に宿泊。CGは、聖信仰教会訪問。ミニ観光買い物。

7日・日

MGは警察学校訪問、聖嬰兒教会礼拝、夜マニラへ  
CGは、聖グレゴリー教会で礼拝・昼食。午後マニラへ

8日・月

朝食後、ショッピングセンター、カトリックマニラ大聖堂、昼食、サンチャゴ要塞、夜、反省・送別会。夕食。

9日・火

朝食後、午前10時45分マニラ空港発、中華航空で台湾乗換え、午後7時20分福岡空港着。

## 目次

### 参加者の感想文

フィリピンキャンプを終えて	小林史明	2
2回目はもっと良いぞ!	牛島幹夫	3
フィリピン報告	家入貴裕	4
フィリピン・ミンドロ島へ行ってきました	沖本恭子	10
フィリピンワークキャンプについて	野田晃助	5
フィリピンワークキャンプに参加して	山崎洋	6
フィリピンウルルン滞在記	山口皓平	7
フィリピンレポート	和田有加	7
ミンドロ島の大地と空にはさまれた!!	山本尚生	8
(事務所職員) リンさんからのメール		11
作業と交流の内容紹介写真	(省略)	
キャンプ日誌(コギオの作業)	小林史明	11
ミンドロ島グループの行動記録	牛島幹夫	16

## フィリピンキャンプを終えて

熊本聖三一教会 司祭 小林史明

福岡空港を飛び立つのが、機材の不良で40分も遅れて、経由地台北までの揺れる飛行機の中で、「はたしてこのキャンプはどうなることか」と心配していましたが、フィリピン中央教区の配慮ある受け入れで、それぞれのグループが、与えられた仕事を達成し、無事に9名全員が帰ってくることができて、感謝です。初めて外国へ行くことになったメンバーもいましたが、ツアーの観光旅行とは違って、直接フィリピンの人々や、同じ聖公会の教会に触れて、それぞれの持っている心の世界が、うんと広がったのではないかと、思います。

私自身も21年ぶりにフィリピンを訪問し、前はアメリカ聖公会の祈祷書を使っての礼拝でしたが、1999年にできたというフィリピン聖公会の祈祷書をもらい、「この国も独立した歩みをしているんだなあ」と実感しました。前に行った時、マウンテンプロビンスのサガダにあるセントメリーハイスクールの3年生で、我々を迎えてくれた生徒の一人だった少年が、今回私たちと作業をしたネッド司祭であったことは、大変な驚きでした。また、一緒に働いた67歳のマテオさんが、1990年

にはサウジアラビアで働いていたこと、ところが湾岸戦争で、クウェートやサウジでの6年間の外国での労働をやめて帰ってきた話を聞くと、「あの時、私もイスラエルに居たんですよ。」などと話しました。女性が日本や香港へ働きに出ていることは知っていましたが、英語を子どもの時から話しているこの国の人たちは、男性も外国で働いていることを知りました。「国際的に活躍している。」と言えば聞こえはいいですが、どうして自分の国で家族と一緒に暮らせないのか、英語が話せることで、逆に国の産業が伸びず、外国へ労働力として出かけて、外貨獲得をしなければならない事情に、複雑なものを感じました。朝食に用意された紅茶がアメリカ製であることが気になり、ネッド司祭に、「フィリピン製の紅茶はないのか。」と問うと、「あるんだけど、宣伝する費用がないんだ。」という返事。「宣伝しなくても、みんなアメリカの紅茶はやめて、フィリピン製品を買うようにしたらいいんじゃないか。」と言うと、「そうだ。」と同意してくれました。

日本に帰って最初にやらなければ、と思ったのは、宗像の教会の写真撮ることでした。コギオの教会でペンキ塗りをしている間、教区報1月号の九州教区の各教会の写真を見せたら、宗像の教会がかわいくて、マテオさんもネッド司祭も気に入って「こんな教会になったらいいね。」と言うので、「それじゃ、内部の写真も撮って、送りますよ。」と答えたからです。そして、もうひとつ。フィリピンへ行く前に、熊本の教会の土曜学校の子どもやお母さんと折り紙や凧を作ったり、手紙を書いたのを、ダグラス司祭の教会で紹介しました。すると彼のいるイゴロット村の特産の帽子をもらったので、子どもたちと被っている写真を撮りました。これも送って、これからも交わりを続けたいと思っています。今回の参加者が、今後もそれぞれフィリピンの仲間との関わりを続けて、教区レベルだけでなく、教会や個人レベルでも協働する関係を続けてほしいと思います。

今後どのような働きができるか、フィリピン協働委員会も考えていますが、何箇所も見て回るより、じっくり特定の教会で、そこの人々と深い関わりを持ち、ずっと継続した協働関係が続けられたら、と私は思っています。

最後になりましたが、教区のみなさんの祈りと援助で、素晴らしい出会いと協働の機会が与えられましたことを感謝いたします。

## 2回目はもっと良いぞ！

巖原聖ヨハネ教会  
司祭牛島幹夫

昨年8月に続いてフィリピンへ行く機会が九州教区から与えられたことを心から感謝します。また、今回は昨年体調不良のために行くことが出来なかったミンドロ島へ行く機会が与えられ、その巡り合わせを作ってくれた神様に感謝しています。

さて、今回でフィリピン中央教区を訪問するのは2回目です。(フィリピンに行くのは3回目です。)ミンドロ島に行くのはもちろんはじめてですが、いろいろなところでいろんな方と再会することができました。私にとっても今回のキーワードはこの再会だったと言っても良いと思います。

まず、到着した空港で、空港の雰囲気に再会です。前回とは到着したターミナルが違うのですが、司祭の格好をしている私に対する扱いは一緒です。なんというか司祭の格好をしている私に対して無条件の信頼をいただいて、フィリピンという国がキリスト教国だということを肌で実感します。そしてその後、迎えに来る人がたくさんいるスペースで迎えの車を待ちます。当然ながら迎えの人は私の顔を探して迎えに来てくれます。「迎えに来たぞ」という顔をして手を振ってくれた教区事務所の運転手 **Julio** の姿を見つけた時に、ものすごく大きな平安を覚えました。

教区事務所についてからもそうです。ディクシー主教をはじめ、事務所のスタッフ、司祭達、みんな懐かしい姿です。また、昨年夏にいろいろと案内してくれた方達は、あの場所はどうなった、この場所はどうなったということをお話してくれます。教区事務所の横の食堂、スプーンとフォークを使っての食事など全てがなつかしく私を迎えてくれているような錯覚を覚えます。1回目は緊張感のある日々でしたが、2回目である今回は知った顔によって安堵感を覚える旅となりました。

今回の旅ではいろいろな所を訪問しましたが、そのうちの3カ所は前回にも訪ねたところでした。それぞれで、また懐かしさを感じることができます。久しぶりですね！と声をかけられます。これがまた素晴らしい体験で

す。当たり前と言えば当たり前のことです。日本ででも、久しぶりの人に会えば「やあ、久しぶりです」と声をかけあうでしょう。でも、何かが違うのです。空気が違うというか、雰囲気が違うというか、巧く言葉では説明ができませんが、心地よい平安を感じる瞬間がそこにありました。

ぜひ、フィリピンの教会を九州教区のいろいろな人に訪問して欲しいと願っています。それも、1回でなく是非2回です。誰かとフィリピンで再会したときに、きっと何とも言えない平安と幸せを感じることに信じています。

教区報にも書きましたが、ディクシー主教が最後のパーティーの席で「九州教区とフィリピン中央教区との間に今橋が架かり始めています。交流を続けて行くことでこの橋をより強い物にしていきましょう。」と仰ってくださいました。私も、その意見に深くうなずきました。ぜひ、この報告を読んだ方が、次の機会にフィリピンに行ってみてほしいと思います。また、今回の参加者が何年先になっても、またフィリピンへと行って欲しいと思います。

私は、交流はなるべくいろいろな形で行われるのが良いと思っています。昨年は司祭の交換プログラムがありました。今回は青年達が行きました。次は、どんなグループでしょうか？楽しみです。この文章を読んで下さった皆さん。次はあなたの番だと思いますよ！！

最後になりましたが、今回の訪問のために献金して下さった方、お祈りで支えて下さった方へ心からの感謝を申し上げます。ありがとうございました。



## フィリピン報告

福岡教会 家入貴裕

三月二日から三月九日までの一週間、フィリピンワークキャンプに参加出来た事を嬉しく思う。

行く事が決まった時点では、未だ半信半疑の状態だったが、その日が近づくにつれて、不安や、昂揚感を感じる様になった。準備はそれなりに、色々と大変ではあったが、沢山の方々に支えられ、助言をして頂いた。中には、後に「全然違うじゃねえか！」と云うものも有ったが。

現地での作業の中で、やはり最も気を使い、意識的であったのは、コミュニケーションを如何にして取るか、取れるのか、と云う点だった。しかも英語で。自分としては、今年の一ヶ月半ばに知り合った英国人の「ジェイクス(福岡教会、司祭館の一室で生活中)」と、稚拙ではあるが、何とか日常的な会話はしていたので、そこまで身構える事は無かったが、それなりに不安感を持っていた。そして実際にフィリピンの同年代ぐらいの若者達と話してみると、彼らはとても流暢に英語を話すので、分からない事は沢山あったが、僕等は何とかして相手の言葉を理解しようと、必死に、注意深く、聴き探っていた。それでも無理な時は、一緒に行ったメンバーの中に、日常会話程度なら難無く出来る者が五人程いたので、助けてもらったりした。しかし、皆「何とか自力で」と奮闘していた様に思う。僕も含めて。

何で僕等は中学、高校と英語を学ぶのにも関わらず、思った通りに話せないのだろうか。酷く恥ずかしかったのを覚えている。

前々から、観念的ではあるが、想像していた事がある。時として、音楽は会話を必要としない。つまり一緒に演奏し合う事により、音の一音、一音が言葉として成り立ち、それによって言語による会話の代替行為が行われる、と云うことだ。これはとても大事な事で、直接、心に作用する。これは、今回のプログラムの、日本人とフィリピン人という場合だけではなく、日本人同士にも云える事だ。云うならば、言葉が通じる、通じないに関わらず発生する、現象だ。実際にメンバーのコーヘイとも何回か演ったし。

拙い英語で「俺は音楽が好きでギターを演る」と言うと、「何か弾いてくれ」と言われる。「ブルーズは好き？」

と訊けば、「好きだ」と。ならばと、知っている曲を演ったり、即興で演ったりする。そこには音楽と人しかなくて、コミュニケーション手段としての会話は要らなくなる。余計な物はどんどん無くなって行って、直接的に相手の心と繋がる。これはとても心地良く、暖かく、とてもとても素晴らしい事で、とても素敵な事なんだ。

言語、習慣、文化、思想、思考、歴史、経験、人種、肌の色、貨幣価値、生活水準、生まれた国、それぞれが違っていても、そんな事はどうでも良い下らん事でしか無いと気付く。今まで生きてきた全てが違っていても、その場ではもっと上等な何かがあって、共にそれを共有することが出来る。それはお互いに強烈に、痛烈に響き合う。それはどんな理屈よりも強くて、「本当」として、そこに存在する。楽器を演る者ならきっと分かると思う。あの瞬間、ドキッとする。

それを、日本では無い外国、フィリピンで体感、体験出来たことは、財産と呼べる程の所産だと思う。

願わくば、もう少し弾きやすいギターだったならばと思うが。

出来るならば、又、このプログラムに参加したい、と思う。今度行くときは、荷を減らし、自分のギター、アンプを持ち込み、思う存分演りたい。彼らの笑顔に勝てるぐらいの何かを残してこよう。自分探し等と云う、無駄な徒勞の為ではなく、厭世的な生き方を覆す為でも無く、唯、感じれば良いよ。

道中、皆が無事で有った事に感謝をし、メンバーの一人一人に、ありがとう。楽しかった。ひたすら楽しかった。又、同じような面子で行けたら良いね。本当に本当に本当に、全ての人達にありがとう。

又、会おう。約束もあるしね。その時まで、皆に幸多からん事を。

心から祈りを込めて、ありがとう。



## フィリピンワークキャンプについて

大牟田聖マリヤ教会 野田晃助

フィリピンへの先入観を少なからず持っていた私は、現地に着いてまず車の多さとビル群に驚いた。気温は予想していたよりもはるかに高く、マニラの街を車窓から眺めながら1日目の目的地ホレブハウスに向かった。

ホレブハウスは日本で言うところの青年の家に似ていて、環境はかなりよかった。着いてすぐに歓迎会があり、そこで現地の学生達と知り合った。彼らも大人達もみんな陽気で、私達はすぐにうち解けていた。歓迎会は私達のことを配慮してか、歌や踊りが多く、みんなで楽しく過ごし、夕食もおいしかった。ホレブハウスに帰ってからも学生達との会話は遅くまで続いた。私達はもう友達だった。チェイス、ジェマ、リン、また会えるといいな。

2日目の朝、朝食をすませると、私達はそれぞれコギオ、ミンドログループに分かれた。ミンドロ島に行くには半日かかると聞き、その時間がもったいないと考えた私はコギオグループに入った。車に乗り、いよいよワーク目的地を目指す。途中、マニラの街のフィリピンバスとサイドカー付きのバイクが印象的だった。

コギオのセントグレゴリー教会は建立7年の教会で、お世辞にも綺麗とは言えなかった。正直、日にちが足りるのかと不安になったのを覚えている。着いて一休みするとすぐに作業に入った。まずは掃除からだ。天井、壁、床、窓すべて綺麗にした。ホコリがすごかった。掃除が終わり、いよいよペンキ塗りに入る時、天井や窓サッシ、床、壁、梁まですべて塗ると聞いて、まともな姿で日本へ帰ることはできないと覚悟した。

その日を含めて3日間はすべてペンキ塗りに費やした。真夏の日本に匹敵する、うだるような暑さの中、ペンキのへらを持つ手がつるくらい働いたのは人生初めての経験だった。そんな中、現地の子供達との交流があった。日本人が珍しかったのだろう、私達が作業する傍らにはいつも子供達がいた。交流といってもたいしたコミュニケーションはできなかった。なぜなら彼らは現地語、つまりダガログ語だったし、おまけに私は英語もろくに話せなかったのだから。それでも彼らを写真にとるときはみんなとてもいい笑顔だった。

5日目、まだ作業は途中だったが、私達はダグラス司祭のホーリーフェイス教会を訪問した。そこでは子供達に日本の文化に触れさせるべく、折り紙や凧を教えた。みんなとても喜んでくれて、私も嬉しかった。ここでも子供達の笑顔が強く印象に残っている。

夕方、セントグレゴリー教会に戻ると、教会は立派に生まれ変わっていた。現地の人たちが、私達が留守の間に完成させていたのだ。そのときに感じた達成感はきつとみんな一緒だったのだろう。

6日目は日曜日だったので礼拝があった。いくら私が礼拝嫌いだとしても自分たちが塗り変えた教会でのそれは決して嫌な気持ちではなかった。礼拝が終わると昼食会があったが、そこでもやはりみんな陽気で会話ははずんだ。その時、英語は小学校高学年で習うと聞いた。もしかしたらフィリピンの教育は日本より進んでいるのかもしれない。というのは、ホレブハウスでの学生達も自国の歴史はよく知っていたからだった。

コギオのみんなと別れた私達はその日の夕方にはホレブハウスに戻ってきた。ミンドログループとも（表現はおかしいが）久しぶりに再会し、この4日間について語り合った。お互いの話が尽きなかったのは、その4日間がとても長く感じられたからだろう。

7日目は観光したが、それまでの内容が濃かったのだろう、私は余韻に浸っていた。その日は他に、私達のための送別会があり、また歌や踊りで楽しく過ごした。私は別れを惜しむというよりも、次の日日本へ帰る実感がなかった。私の中でフィリピンという国も人々もすごく身近に感じられたからだ。その夜はキャンプメンバー全員でこれまでの思い出や日本のことについて話し合った。みんなそれぞれフィリピンへの誤解や偏見が解け、得たものがあったようだ。

そして今、こうして日本でレポートを書いているわけだが、未だにフィリピンの存在は近いままだし、また行きたいと思える国である。一番心配だった英語力に関しても、本人の話そうという思いが伝われば相手も真剣に聞いてくれるので、それなりに会話できるものだ。大切なのはそういった姿勢なのである。

最後に、今回の旅で知り合った参加者のみんな、現地で世話してくれた人たち、それと何よりコギオで毎晩一緒に酒を酌み交わしたファーザー・ネッドに感謝して、この場をかりて厚くお礼申し上げます。

## フィリピンワークキャンプに参加して

戸畑聖アンデレ教会

クリストファー 山崎 洋

初めに、今回ワークキャンプに参加できる機会を与えていただいたことを感謝しています。特に、僕にとって海外に行くこと自体が初めてだったのでいい経験になったと思います。

今回のワークキャンプは小林司祭、牛島司祭と他青年7名の総勢9人でフィリピンに行きました。フィリピンではコギオと、ミンドロ島の2グループに分かれて行動をしました。僕は小林司祭、家入君、山口君、野田君の5人でコギオにあるファザーネッドのセントグレゴリーチャーチという教会に行きました。そこでは、僕たちのために家を用意してもらい、この家を拠点としてコギオに5日間滞在しました。ここは、やはり日本人には少々危険な地域らしくて、作業している間以外は拠点である家にはほぼ軟禁状態でした。

僕たちのグループは、最初の3日間セントグレゴリーチャーチのペンキぬりをしました。

作業の工程、初日に内側と外側の掃除、天井とはりを白で塗装（途中でやはり茶色に変更になった）、二日目に初日の作業の残りとして外側の壁と窓、屋根部分、内側の窓の塗装、三日目に前日の作業の残り、ドアの塗装でした。この作業を教会のメンバーのマテオさんが一緒に最初から、途中でマテオさんのお孫さん、その友達の二人も加わり作業しました。

その作業中に近所に住む子供たちがいっぱい集まってきました。その子達に接して分かったことですが、タガログ語しか話せないみたいで、「名前は何？」と英語で話しかけてきましたが、意味を理解してないみたいで、答えたはずなのにまた聞いて来るということが続きました。そして、カメラをだすと、自分を撮れと激しく迫ってきて、日本の同じくらいの子達と比べて皆すごく元気で明るいなど実感しました。そして、日本と違ってフィリピンは経済的には貧しい国だけど、心は貧しくないんだ、それが全てではないんだと思われました。

滞在四日目は、イゴロットビレッジという、タガログ語を出来ない人たちが住む地域にあるファザーダグラスのホーリーフェイスという教会にいき、そこで子供たちと凧を作ったり、折り紙をして楽しみました。この教

会の中祭壇が石積みによって出来ており、祭壇の上にはエデンの園が描かれていてとてもきれいな教会でした。そこの子供たちと遊んだわけですが、やはり凧や折り紙は珍しいらしくてすごいしゃぎようでした。お昼まで一緒に遊び、昼食をファザーダグラス、ファザーネッドと取りました。その後、ショッピングセンターにいき買い物をして、次にマニラを一望できる所にいき、帰りました。

五日目はセントグレゴリーチャーチで主日礼拝に出席し、昼食を教会のメンバーの皆と取り、そのままケソンシティにある管区事務所の上にあるホレブハウスに戻りました。

ホレブハウスはフィリピンに着いた日と残りの三日間滞在しました。ここではコギオとは違い、コンビニにいけたりとかなり自由に行動できました。ここでびっくりしたのは、値段の安さで、聞いていたものの実際見てみるとすごいなと思うと同時にこういうなかにいると金銭感覚が麻痺するなど感じました。

ここでは、滞在七日目にフィリピンと一緒にいったメンバー全員でショッピングセンターに行き、レストランで昼食と取り、サンティアゴ要塞に行きました。サンティアゴ要塞というところは、フィリピンがスペイン植民地時代にスペインの拠点として使われていたところで、フィリピンの英雄といわれるホセ・リサールが捕まり、処刑直前まで監禁されていた場所です。要塞といわれるだけあって、その建物は重々しく、重圧感を感じさせるものがありました。その日はそのままホレブハウスに帰りました。

夕方に教区のファザーアンドレスが司会の、お別れをしてもらいました。そこでメンバー一人一人にお土産をいただきました。それは首から提げる筆入れと、ジプニーというフィリピンのバスが描かれた貝の形をした、置時計でした。

今回フィリピンにいけたことで、今まで良く見えなかったことが見えたりフィリピンの友達が出来たりと、何から何まで全てが新鮮で、とても充実したワークキャンプになりました。またこの企画が計画されたときにはぜひ参加したいと思っていますし、今回参加しなかった人たちにも参加してほしいと思っています。

## フィリピンウルルン滞在記

佐世保復活教会 山口皓平

3月2日から1週間、私はフィリピンワークキャンプに行った。そして、色々な経験をして帰ってきた。まずは、こうして無事帰って来たことを、今回私達がフィリピンに行くにあたって色々支援していただいた教会関係の方々に深く感謝したいと思います。

前日、私たちは草香江の教区センターに泊まり、明日から始まるフィリピン行きに、期待と不安が混じった心境でいた。食事はおいしいのか、英語は通じるか、現地の人々とコミュニケーションが計れるか。正直不安の方が大きかったと思う。

当日、まだ寒い日本を後にする。これから1週間、日本には戻れないと思うと少しさびしい。

フィリピンへはタイペイ経由で行った。マニラ空港に着くと、もう空気が違った。思っていたよりもかなり暑い。着いてすぐに現地の人達と交流する。始めはおっかなびっくりでなかなか話しかけることができなかつたが次第に積極的に話していくようになっていった。食事とてもおいしく、主食は米で、肉、野菜、フルーツと、バランスも取れていた。また、現地の学生とも交流し、夜遅くにコンビニへ行ったり、お互いの事を語ったり、楽しい夜を過ごした。

2日目、今回の目的でもある、セントグレゴリー教会の修復作業が始まる。最初に教会を見た時、大きさはそれほどでもなかったのだが、ほとんど廃屋のような感じだったので、果たして終わるかどうかわからない不安だったが、作業自体は主にペンキ塗りがメインだった。作業中に現地の子供達が話しかけてきたりしていた。彼らにとっては、日本人はめずらしいらしく、珍獣でも見るように見られた。彼らはとても無邪気でとにかく笑顔がよかった。ひたすらに純粋な彼らを見ていると今の自分には無いものだなと、何だか考えさせられてしまった。作業は朝から昼休みをはさんで晩まで続いたが、皆作業が進むにつれて真剣になっていった。作業は約4日間におよんだが、結局、最後の最後で完成には至らず、あとは現地の人に任せる形になってしまった。それだけが心残りだったが、後日、行ってみるととてもきれいに仕上がっていた。さっそく礼拝が行われ、私達も参加した。現地の子供達も

集まってくれて、とてもにぎやかな礼拝になった。礼拝を終えて皆で食事をして盛り上がった時、このワークに参加してよかったと思った。達成感でいっぱいになった。残りの日程はほとんどが観光に費やされた。ショッピングセンターへ行ったり、高台のレストランへも行った。どれもこれもいい思い出ばかりだ。こうして振り返ってみると、本当にたくさんの方が思い出される。行く前にかかえていた不安がうそのように、今では今回の旅行が、私にとって、かけがえのない経験だったと胸を張って言える。また、この貴重な経験を多くの友人に語りたいと思う。自分一人の経験にとどめておくのではなくて、今回行けなかった人や、少しでも今回のワークキャンプに興味があった人には話を聞いてほしいと思う。そしてこの企画を、続けて行ってほしいと切に思う。つたない文章ですみません。

## フィリピンレポート

福岡教会 和田有加

まだ3月だというのに私は真っ黒。日焼けのあとで肌のあちこち皮がむけています。3/2~9、フィリピンにワークキャンプに行ってきました。初めてのフィリピンにドキドキワクワクで気合い十分で出発しました。

フィリピンにつくとやっぱり暑い。空港に着いてトイレにいくと、いきなり便座がありませんでした。ビックリしましたが、これは今まで私が経験したことのない旅になりそうだと一気にテンションが上がりました。

その日の夜、現地の教会の人たちが私たちの歓迎会をして下さいました。私たちと同じ年くらいの青年もたくさんいてくれて、ひょうきんな彼らとはすぐに仲良くなれ日本の歌を歌ったり、踊ったり、食事をしたり夜遅くまで楽しい時間を過ごすことができました。

翌日からは私たちは2つのグループに別れて行動することになっていました。私はマニラから車と船で6時間ほど離れたミンドロ島という所に行きました。ミンドロ島につくと、そこはまた昨日いたところとは全く違い、フェリーからおりてすぐは、すごい砂ぼこりがたっていて、目立つような建物は何1つ見当たりませんでした。

そこからフィリピンの乗り合いのタクシー、ジプニーに乗りました。ミンドロ島は、安全なところとは言えない島らしく、車に乗っていると、チェックポイントがあり、マシンガンを持った警察が車の中を確認します。映画でしか見たことのないような光景で本当にびっくりして私は車の中で小さくなっていました。

30分ほどすると教会に到着しました。周りには田んぼしかなく、たくさんの水牛や山羊やアヒルが自由に歩き回っていました。その夜は、信者さんの家に泊めてもらいました。私たちの住んでいるような家とは全く違い電気もなく、本当にウルルン滞在記のような感じでした。

次の日、朝から教会のペンキ塗りをしました。暑い中での作業の途中、マンゴーやスイカを食べたのはすごくおいしかったです。ペンキ塗りのあと、久しぶりのお風呂でした。お風呂にむかっただけで、着いたところは水牛がたくさん水浴びしている川。この川で水牛と一緒にお風呂です。川の中に飛び込んで、中でじゃぶじゃぶ髪を洗いました。こんな経験もちろ初めです。

川に行くとき、信者さんの車に乗せてもらったのですが、その車がまたすごくて、フッと運転席を見るとウインカーらしきものが飛び出ていて下に垂れていました。ビックリしてしばらく見ていると、運転をしていた人は特に動揺することもなく、その飛び出たウインカーをもとの位置に差し込んで、普通に運転を続けていました。すごすぎです。

この夜は、礼拝堂のベンチで寝ました。こんな調子でミンドロ島に3泊ほどし、ミンドロ島とはお別れ。フェリーでバタンガスに戻り、そこから車で移動し今度はタガイタイという所のレオン司祭宅に泊めてもらいました。タガイタイは避暑地らしく、ミンドロ島に比べるとすごく涼しかったです。

翌日PNPA（フィリピンナショナルポリスアカデミー）というフィリピンで唯一の警察の士官学校の聖餐式に行きました。PNPAには同年くらいのカッコイイ青年がたくさんいて食事をしたりドラを叩きながらステップを踏むダンスをしたり楽しかったです。PNPAの人たちは私たちにすごく積極的に話し掛けてくれるのですぐに仲良くなれ何人かの人たちとはメールアドレスを交換したりして友達になれました。

その夜、車で初日に泊まったホレブハウスと言うところに戻りました。離れて行動していたもう一つのグルー

プのメンバーとの合流です。久々の再会、みんな私を見て「焼けたね〜！」鏡を見ると顔も体も真っ黒！！ここ何日かで私はすっかりフィリピンぼく変身していました。

その夜は、宿に初日に歓迎会をしてくれたフィリピンの青年たちが遊びにきてくれ、現地の青年たちを交えてそれぞれのグループの報告をしあったり、世間話をしたりおそくまで楽しみました。

次の日は大きなショッピングモールに行って買い物をしたりフィリピンの観光地をまわったりしました。その日の夜も最後の夜ということもあってみんなで遅くまで語り合いました。

楽しい時間はあっという間にすぎ、すぐにフィリピンとのお別れの朝になりました。空港まで車で送ってもらったのですが、前日騒ぎすぎてすぐに寝てしまい、気が付くともう空港でした。出国審査を済ませこれでお別れかと思うとすごく淋しかったです。

飛行機にのり日本につくと、空港では私たちだけが半袖真っ黒。ちょっとおかしかったです。

こんな感じで私は初めてのフィリピンワークキャンプをすごしました。ここには書ききれない事がまだまだたくさんあって、今これを書きながらもあれもあったこれもあったと、次々にでてきてしまいます。

本当に今までしたことのないような良い経験ばかりで話がとまりません。とにかく本当にこのワークキャンプに行けてよかったです。ただ現地のタガログ語が勉強不足で全くわからず、タガログ語での会話ができないということがとても残念でした。次の機会を楽しみにこれからちょっとタガログ語も勉強して次回に備えようと思います。

## ミンドロ島の

# 大地と空にはさまれた！！

山本尚生

その時はまたやってきた。もう3時間前からその時は定期的にやってきている。僕はそれを過去も何回も経験しているが、体に襲いかかってくるそれにどうしても慣れることが出来ない。

その行為を僕はもう4回ぐらい繰り返していて、3回目までは礼拝堂の奥にあるトイレに駆け込んでいた。トイレにむかいながら「トイレの近くに寝ててよかった」と思うぐらいぎりぎり、気がつけば世界のいろんな便器に世話になっているなあとしみじみ思うのであった。

4回目はなんとなく外にでたくなり、礼拝堂の入り口の鍵を開け転げるようにして外に飛び出して、胃の中のものを出した。「出した」というより「出た」なのだが、胃に労働組合があったら訴えられるだろうなと思うぐらい胃は重労働していた。胃が休み時間に入ると、僕はゴロリと仰向けになり目をつむったまま生温かい風をうけていた。「日本はまだまだ寒いんだろうな」と半袖に自分にきづきながら数分間眠ってしまった。

その日はここミンドロ島に来て二日目をつかえていた。草原の中にポツリと立っている教会のペンキを塗るとというのが今回ワークキャンプのメインイベントだった。このミンドロ島に来た初日、むかえてくれたのはシャーウィン司祭で（久しぶりに客が来たなあ）という表情をして、（まあまずこれを喰え）といわんばかりに芋とジュースを準備してくれていた。パサパサしすぎていて（芋の種類だ！）と気づくまで少し時間がかかったが、かめばかむほどおいしかった。

初日は移動が長かったので夕食を500mほど離れている信徒の家でご馳走になり、礼拝堂の中の椅子を並べて寝た。

次の日の朝は「カチャカチャカチャ」とか「トントントン」という音で目が覚めた。その礼拝堂に響き渡る音からは、なんとなく必死さが漂っていた。数分後その音を僕が奏でることになる。

シャーウィン司祭が「おはよう」といって「コーヒーを飲むなら・・・」とお湯とインスタントコーヒーを準備していた。彼はそのコーヒーをすでに飲んでいる。僕も飲もうと思いビンのふたを開けコーヒーをすくおうとするが、塊になっていてなかなか思いどおりに取れない。保存が悪かったのか賞味期限が切れているのかビンにしっかりこびりついているが、コーヒーが飲みたいため気がつくとも必死で「カチャカチャカチャ」「トントントン」の音色を礼拝堂に響かせていて（ああ彼もさっきこの作業をやっていたんだな）

ということがわかった。

朝食は昨日食べた家でしっかり食べさせてもらった。一緒に来ている牛島司祭は「これがうまいちゃんね」と博多弁のような対馬弁のようななまりで、一品食べるごとに言っている。結局全部おいしいのである。

シャーウィン司祭が「今日はペンキをとことん塗ってもらえんね」というようなことを言ったが、僕は昨日からペンキや道具の存在を教会の中で目撃していなかった（買い出しに行くのか、村の人が持ってくるのかなあ）と考えていたが、教会に戻るとシャーウィン司祭は祭壇の下についている扉を開けてその中からペンキやローラーやはけを取り出した。（何でそんなところにしまってるのよ？）と聞こうと思ったが作業は素早く始まってしまった。

いつの間にか村の若者4人が手伝いに来て、いかにも村一番のワルのようなニイチャンが、暑いのにニット帽をかぶったまま「塗ってやるぜ！！」という目つきをして黒くてごつい腕をむき出しにして立っていた。彼らもまた素早くその辺においてある木や棒ではしごを作り、ローラーに棒を付け着々とペンキを塗る体制をつくった。

ペンキ塗りは意外とはかどり僕は写真を撮る余裕もあった。そもそもペンキを塗る道具は四つしかないもので、4人までしか作業は出来ないのである。しかし、あれよあれよのうちに二度塗りまでおわると、シャーウィンが「白のペンキと緑のペンキを混ぜるのだ」と言って混ぜ始めたがうまく混ざらず「じゃおわり！」とあっさり作業は終わってしまったのであった。フィリピンでのメインイベントはほとんどニット帽とその仲間がやってしまったのである。

ニット帽とその仲間は「まだまだ塗れるぜ！塗ったりねえよ！」と言ったかどうかはさだかではないが、一仕事終えた男の顔になって帰っていった。シャーウィン司祭が「川に行こう」と言うので準備をしていると、ニット帽がジープに乗ってやってきた。そのジープはシルバーという、いかにもワルそうな色をしていて（さすが村一番！）と思ったが、ミンドロ島にあるジープはすべてその色だった。

川でゆったりとした時間を過ごす、もう夕食の時間になっていた。その日の夕食は昨日とは違う信徒の

家で、ニット帽の家だった。彼のお母さんはとても優しい人で、英語も流暢に話していた。そういえばニット帽とはまだ一言も話していないと夕日を浴びながら思っていると、ちょうどニット帽が例のジープで帰ってきた。しかしその後ろにはライフルを持ったおっちゃんに乗っていて、非常に危険人物の匂いが漂っていたが、彼はニット帽の親父で職業はハンターだということがわかった。その運転手役を果たしているニット帽は、その時すでにニット帽をかぶっていなかったがとてもたくましく見えた。

アジアを旅するといつも気づくのが、子どもと野犬が多く、たくましいということである。病気にかかったような犬が人間を無視してその日の食べ物を探している。とてもやせ細っているが、人間にこびる事なくたくましい。子どもたちもいろいろなものを遊び物にして遊んだり、裸足で大人に混じって仕事したりとエネルギーがみなぎっているように感じる。ネパールでもそう思ったし、チベットでも、そしてこのフィリピンでもやっぱりそうだった。ニット帽のたくましさ、腕の太さはそんな中で育ってきたからなのかもしれない。

夕食を食べ終わり、途中で1リットルビールを6本買って教会へ戻りみんなでのんだ。僕は気持ちがよかったのですがぶがぶと適当にビールを体に流し込んだ。

風が冷たく感じて僕ははっと目を覚ました。教会の入り口ですっかり眠ってしまっていた。(ああ胃に重労働させているのはあのビールのせいなのかなあ)と胃にまた異変を感じながら思った。周りは静かで、虫の鳴き声と風の音が聞こえてくる。(俺はこんなところにまで来てなにやってんだよ!)と、そのままそこで寝たくなかったが目をゆっくり開けると、空には星がぎっしりと張り付いていた。ヒマラヤでも見たのと同じ満天の星空が広がっていた。(あれ!?昨日の夜はこんなに星はなかったよなあ)と思いながら、僕はミンドロ島の大地と空にはさまれながら一人で贅沢な気分をあげていたのだ。

## ミンドロ島へ行ってきました。

久留米聖公会 沖本 恭子 ☺

(写真省略)

カラバオ 川にお風呂に入りに行き、そこで頭・体を洗い、水牛と一緒に入浴…と初めての経験でした。もちろん私は河上にいましたよ。フィリピンは暑いのでどの川でもカラバオが入浴していました。

ミンドロ島グループ 牛島司祭・Fr Sherwin・ひさおくん・ゆうかちゃん・きょうこの5人で楽しく仲良くペンキ塗りをしました。ミンドロ島グループは移動が多くて大変でしたが、島では少数民族の村を訪ねたり、夜風に吹かれながらゴロゴロして、とても素敵な時間をすごすことができました。

フィリピンに行き電気はなく、舗装されていない道路やそこら中にあるカラバオやヤギと共に生活し、自分自身の日本での甘えた生活を見直し、教会に自由に行けるありがたさを強く感じました。この教会の周りにもゲリラがいるらしく、久留米で生活していたらありえないことが頻繁に起こっている怖さ、面白さ、朝日・夕日・青空・星空の美しさを忘れることはできません。久留米の教会もミンドロ島の教会も同じく、神様とつながっています。この旅に参加させていただき感謝の気持ちでいっぱいです。

The Anglican Episcopal Church 正面からの写真です。ここが私たちの宿です。教会の前に寝転んでいつもみんな語り合っていました。この教会の周りにはなんにもありません。毎晩停電します。教会の中はこの壁の色でしたが、真っ白になり、とても明るくなりました。私たちが到着した日の朝に結婚式があったそうです。

みんな このワークに参加したみんなです。このメンバーを始め、フィリピン中央教区・フィリピン警察学校の青年、今回訪れた教会の方々と仲良くなれたのも大きな糧です。フィリピンの青年も九州教区からの参加者も、神様という大きな共通点があるのでまたいつかきっと再会できると信じています。

## （事務所職員）リンさんからのメール

親愛なる五十嵐主教様

フィリピン中央教区から、心からのご挨拶を申し上げます！

先ず第一に、タクロバオ主教と、同夫人ジュリエット司祭の航空運賃と旅行保険のためとして指定された九州教区からの15万円を確かに受け取りました。2004年3月2日付の公式領収証番号#0286を後日送らせていただきます。

私たちは、フランシス小林司祭とバルナバ牛島司祭のお世話によって、中央教区へほとんど1週間のワークキャンプに来てくださったグループの人々が、アンティポロのコギオや、西部ミンドロ島の私たちの兄弟姉妹と友好を深め、楽しんでくださったことを大変うれしく思っています。彼らが到着した夜と、出発前夜、教区センターのスタッフは、一緒に楽しい時を過ごしました。それらの夜には、私たちは（到着した夜に彼らが語ったことから）彼らの期待していることについて、そして、（日本へ出発する前の晩に彼らが語ったことから）彼らの期待したことの結果について、学ぶことができました。

私たちは、グループの人々の、ギターやサクソフォンやフルートや、踊り、そして歌の賜物を披露していただき、大変楽しませていただきました。きっと彼らが親しく働いた教会の人々は、彼らが訪問し、時間を共にしてくださったことを、大いに感謝していることと、私は確信します。また、彼らがここに来ることができるように、準備を進めて、ご支援くださったことを感謝します。

主教は、今（事務所から4～5時間の）ヌエバ・エシハへ、私たちのメンバーの一人の葬式に行っています。その人は、私たちの宣教に大変力になって働いてきてくださった方です。彼らは、昨日シャーウィン・リングリン司祭やアンドレス・パラテス司祭と一緒に出かけました。彼らは今朝9時の葬送聖餐式を終えて帰ってくるでしょう。

フランシス小林司祭様、ラブテン司祭への手紙などは、教区事務所へ送っていただいてもかまいません。あなたのメッセージを携帯電話で送ったのですが、彼からは返事が来ません。彼の携帯電話は壊れているのではないかと私は思います。幸せな日をお過ごし下さい。

リン・バギウエット 2004年3月12日

## キャンプ日誌（コギオの作業を含む）

司祭 小林史明

3月1日（月）

午後3時30分頃教区センターに着く。主教室で、教区からの贈り物である、博多人形のレリーフ「最後の晩餐」を見せてもらい、梱包してもらおう。デキシー・タクロバオ主教夫妻を招くための15万円を預かり、またBSAからの3万円、そのほか、教区から4万円と、今までの残りの、3700ペソと230ドルを預かる。また、旅行傷害保険の証書、パスポートのコピー、空港での航空券と交換するバウチャーを受け取る。向こうでの交通費が予想されるミンドロ島グループの牛島司祭に、余ったペソ、ドル、そして教区からの4万円を渡し、私はBSAの3万円を持って、出かけることにする。5名が教区センターに宿泊。準備会に出席できなかった和田さんも顔を見せた。

3月2日（火）

朝起きて、セブンイレブンでパンとスープなどを購入。7時までに食べてもらう。7時10分に主教、濱生司祭の車に分乗して空港へ出かける。7時40分に空港に着くと、久留米の山本君、沖本さんも早く来ていて、見送りに、佐山さん、外池夫妻、藤井東秀さんが来ている。預ける荷物をチェックしてもらって、別のフロアで出発前の小林の挨拶と主教にお祈りをしていただき出発。ところが、飛行機の具合が悪く40分も飛ばない。やっと飛んでも、ずっと気流が悪く、12時15分（現地時間）に台北へ着く。1時40分の出発までの間に、グローバルスタンダードの携帯電話で事務所に電話。牛島司祭が新聞の配達を止めておく連絡を忘れていたので、そのことを対馬の信徒の人に連絡してもらおう。直接日本に電話できるので助かる。マニラまでの飛行機は順調だったが、飛び立つ前から入国カードが配られ、忙しくなる。記入例を示したものを印刷して配布しておいたので、何とかなった。2度目の昼食を食べ、飛行機は4時前に空港に到着。真夏のマニラ空港の中を、荷物を運んで、外では少し待つと、教区事務所からの2台の車が来る。メールで何度もやり取りしたアンドレス司祭と初めて会う。もう一人、ホリオさんという運転手がいて、その人の車に私は乗り込んだ。5時20分事務所に到着。中央

教区の青年たちが迎えてくれているが、先ず宿泊のホレブハウスに荷物を運ぶ。急いで歓迎会に行き、先ず、自己紹介。博多人形の最後の晚餐を主教にプレゼントしたり、ゲームをしたりだが、歓迎会でフィリピンの若者のエネルギーに驚く。プログラムの途中で、フィリピン中央教区の歴史や、各伝道区のことなど聞く。食事中に、主教夫妻を招くための15万円を事務所の財政担当であるリンさんに渡す。食事の後は、短いミーティングをして、ミンドロ島には男女2名ずつ。コギオに男5名ということになる。結局メンバーは、ミンドロ島が、牛島司祭、山本君、沖本さん、和田さん。コギオは、小林司祭、山口君、山崎君、野田君、家入君。そして、翌日からの移動や生活のために、5リットル入りの大きなミネラルウォーターを2つ買うことになった。そして、そのほか必要なものを中央教区の青年たちと教区事務所の前にある24時間営業のコンビニへ買い物に行く。するとリンさんが、蚊よけローションなどを買っていた。その後、ホレブハウスでは、中央教区の青年たちと日本からのメンバーがおそくまで話していた。明日は6時半の朝食予定。

3月3日（水）

朝6時40分に出て、教区事務所の横にあるレストランで朝食を食べる。好きなものを選んで皿に載せて支払い（我々は支払わなかったが）自分の席に着く、カフェテリア形式。イスラエルのヘブライ大学を思い出すが、これはアメリカの影響だろう。そのあとミンドロ島へ行く4人がバス停までホリオさんに送ってもらう。今日は一日移動に費やすことになるのだろう。我々コギオグループはネッド司祭の車で、聖グレゴリー教会へ行く。メトロマニラの東に位置し、アンティポロ市のコギオにある教会とのこと。我々5人は管区主教が使っていたらしい住まいで、信徒の人が所有する家に住まわせてもらう。荷物を降ろしたが、すばらしい家なので驚く。周りの家より立派なのだろう。床に大理石もはめ込まれている。そのあとで教会へ行く。教会よりもまず目の前にある大きな屋根つきのバスケットコートに驚く。そして、教会を見ると窓ガラスが割れたりして、スゴイ建物。まるで殺風景な倉庫。看板だけが正面にあって、教会を思わせるだけ。右側には、ガスボンベの下半分を切って鐘にしているものがぶら下がっていた。1991年から始まっ

たこの地域の宣教は、1997年ネッド執事（当時）が派遣されて、現在地に建物が建った。それが3月14日だったので、それに近い3月12日の聖人、聖グレゴリー教皇教会博士を記念して命名したらしい。6世紀の人。最初は屋根だけだったらしい。その後壁がつくられたり、窓ができたりしたが、古材で造ったらしい。正面の壁が薄緑色に塗られているくらいで、あとはむき出し。天井や梁、壁や窓枠などに手を入れたらしい。今週作業して、次の日曜日までにそれが終わると、翌週の3月14日の日曜日には主教が来るので、聖グレゴリーのお祝いにふさわしくなる、とネッド司祭の計画を聞く。そして、午前中はモルタルのついた鉄の窓枠などをこさげたり、汚れを水洗いしたりして、ペンキ塗りの準備。そして、ネッド司祭と教会の信徒マテオさんがペンキを買ってくるのを待つ。白いペンキが来たので、早いところは、天井から塗り始める。昼食後の作業中、となりの聖信仰（ホーリーフェイス）教会の牧師であるダグラス司祭が訪ねてきて、1年半ぶりの再会。彼の好きな日本酒や教会のためのプレゼントを渡す。次の土曜日には、是非彼の教会へ来てほしい、ということで、土曜日は、ミンドロ島グループと合流する予定だったが、変更になる。その前に、昼食を元主教が使っていた家で食べたが、一緒に働いてくれているマテオさんは、67歳。サガダのセントメリーハイスクールの出身とわかる。彼は1958年にマウンテンを出て、聖アンデレ神学校へ入る。私の生まれた年だ。彼は卒業するが、司祭にはならず、神学校の職員としていろいろ世話をしていたらしい。ついでに、ネッド司祭だが、1983年、私がそこを訪ねた時、彼はそこの3年生だったことがわかる。21年ぶりの再会、ということだが、お互いのことなど知るはずもない。尚、彼は2001年に日本に9ヵ月来ているということが分かる。アジア学院で有機農業を学んだらしい。ところが彼の妻は今年の1月に司祭になり、神学校で新約とキリスト教教育を教えている。この教会へは、ケソンから通っているわけだ。午後の作業で、天井の8割以上は塗り終えた。明日は天井の残り、と、内外の壁など、ペンキ塗り中心の日になりそうである。夕食もいただくが、昼は魚、夜はチキンがメインでみんな良く食べる。日本へ山崎君と家入君が電話する。夕食後は、外出しないように言われて、ちょっとショックだったみたいだ。

3月4日(木)

朝7時起床、朝食。8時作業開始のつもりが、8時過ぎにやっと朝食。ごはんとお卵と野菜(これを全部混ぜたらチャーハンになるのに)と思いつつもおいしい朝食で9時過ぎにやっと教会へ。9時に来ると言っていたネッド司祭が現れたのは9時20分頃。しかし、我々も予定より遅かったことを告白。2人が昨日の残り(天井)を塗り、後の者は外側(正面と右側しか塗れない)。白いペンキを塗る。それが終わると茶色で窓枠を塗り始めるが途中で昼。昼はブタ肉と野菜、ごはん。骨付きの豚肉は初めてのことで。午後はひたすら窓枠を塗ったが、途中で「日本人が来た」というので会った。男の人は日本人。女性はフィリピン人。1週間の滞在で明日には日本へ帰るとのこと。彼は、「くれぐれも水には気をつけること、特に氷がよくない」と知らせてくれた。あと、夕食の時にわかったことだが、彼らは結婚式でフィリピンに居て、明日帰るらしい。会った時、直接いろいろ聞けず、彼から「カトリックか」と問われて、「いや聖公会という英国国教会系の教会だ」と答えた。(日本人の男性とフィリピン人の女性のカップルには、どうも遠慮してしまう自分がある)。ところで、午前中1本、午後1本、清涼飲料の差し入れを毎日受ける。ビン入りで355cc。値段は10ペソというから20円。物価は日本の5~6分の1だろうか。夕方、教会の人が手伝いに来て、我々が帰ってからも、作業をすること。我々は6時過ぎに帰り、昨日のブランデーにかわって今日は「レッドホース」というサンミゲルの製品のビールを出される。「日本でのメジャーは？」と問われて、「アサヒ、キリン」などの話になる。ネッドは日本に9ヶ月いて、大阪にも行ったことがあるらしい。他の4人が、日本人だけで話すので、もっとネッド司祭の居る時はいろいろ彼と話すように促す。そして明日以降の計画を聞く。明日で作業は打ち切り、土曜日は伝道所などの案内をするために眺めのいいところへ行き、ダグラス司祭の居るホーリーフェイスで昼食。午後子どもと遊ぶ。日曜日は礼拝の後、教会の人々との交わりをして、マニラに帰るとのこと。

3月5日(金)

朝、今日はマテオさんの奥さんが6時過ぎには現れた。マテオさんは4時に起きて働いているとのこと。いつものながらのおいしい朝食をいただき、8時40分頃には、

ネッド司祭も来て作業にかかる。作業は外の壁や屋根をささえる軒下の骨組みにペンキを塗るのが中心。足場が悪いのでいろいろ苦労したが、何とか作業をする。昼にはゆっくりご飯を食べて、その時、マテオさんとサガダの話などをやる。昼食のデザートにパイナップルが出て大喜び。今年の初物。日本では缶詰のものばかり食べていることなど話す。午後も仕事をしたが、我々の作業で完了するのではなく、教会のメンバーが完了すること。「最後までやりたい。」という者も出たが「自分がやった」と生意気にならないため、神様が我々を去らせるのではないかと、などと言いたい事を言った。早めに作業を終えて、前日冷やしておいたビールをみんなで飲み、大喜び。明日は朝ドライブで良い眺めの所へ行き、昼はダグラス司祭のときの教会を訪ねる。そして子どもと接触するので、アジアの地図や折り紙、そして凧あげなどの材料を持参する予定。ネッド司祭に、**Mass Wedding**の意味がわからず、教えてもらった。結婚しても届けを出さず生活している人々がこの伝道区にあって、子どもたちもいるが、そのままでは登録されていないので、学校へも行けない。そのため、教会が政府と一緒に集団の結婚式を行うとのこと。

3月6日(土)

今日は、作業の残りを教会のメンバーに任せて、こちらは午前中、ホーリーフェイスに行くことになった。日程が前後した。イゴロット村にあるこの教会は180人くらいのメンバーがいるらしい。子どもと遊ぶためにおもちゃ、紙、クレヨン、10色ペンなど持参。初めに凧あげの凧を作ることにする。早く来た子どもには、アジアの地図を見せて、フィリピンや日本、そしてイエス様の生まれたのはどこか、など質問して時間を過ごす。子どもは10時に来るとのことだったので、メンバーに先ず完成品を見せ、簡単な作り方のプリントを示して、作ってみてもらう。それを子どもにも作らせるように頼む。A3の紙を正方形に切り、残りをシッポにする。正方形の凧本体に、自由に絵を描かせたら、フィリピンの国旗を描く子が多かったが、中には、ドラゴンボールを描く子もいて面白い。タコ糸をつけて、教会の前のバスケットボールコートを走り回る。これで一段落。折り紙などをダグラス司祭に渡すと「ここで作って見せろ。」とのこと。そこで、羽の動く鳥を作るが、マネをして作ろう

とする者にはこれがなかなか難しい。私が何度もかわりに作ってやって、渡すとそのうちA3の紙を正方形に切ったものを持って来る者もいる。ところが、折り紙の包みの中に、いろんな形のものの作り方が書かれていて、山崎君は「あやめ」の花を作ってそれを子どもに持たせて、私の所へ持ってくるのでこちらは驚いてしまう。子どもたちが帰って、12時、教会で食事。その前に気づいていたが、礼拝堂の正面には石が積まれて、その上に美しい絵が描かれている。イゴロット族のふるさとマウンテンプロビンスを思い出させるもの。教会の人々が作ってくれた昼食は、豆と牛肉の燻製とを煮たもの。21年前の食事を思い出した。ダグラス司祭とは、教会前で別れて、我々は比較的近くにあるショッピングセンターへ行き、CDなどを観るが気に入ったものはないらしい。山崎君は、皮革製の札を折り曲げないで使えるサイフを、野田君と山口君はTシャツを購入。私はマージャン牌を買いたい気持ちがあって、たまたま置かれているものを見るとこれが大きい。でもチャイナタウンで買えるからとやめておいて、地下で、メンバーの何人かはタバコを買う。車に乗ると、メトロマニラが見渡せる丘の上の喫茶店に行き、コーラを飲む。帰る途中、アンティポロ市の大きな教会を訪ねようとするが、政治キャンペーンでラッシュ。教会の見学は月曜日にして帰る。帰ってみると礼拝堂のペンキ塗りは、床も完了していて大喜び。夕食の時、持ってきた絵葉書（渡辺禎雄氏の聖書版画）を、食事を作ってくれた3人の婦人と、マテオさんに、そして、マテオさんの孫娘には日本のおとぎ話を英訳したものを渡す。それにしても、ネッドの車に明日の説教の入ったファイルを忘れたようで、夜中、説教を書き直すことになった。

3月7日（日）

昨日はネッド司祭と別れた時、車に説教を残していて、困ってしまい、夜2時まで作成した。朝食のオムレツとごはんを食べているとネッドが説教のファイルを持ってきてくれた。そのあと我々は教会へ行くと、驚いたことに子どもが多い。全く、子どもへの話のつもりではなかったのだが、以前幼稚園で、マウンテンプロビンスの話をしたので、それを思い出して、説教など読まずに、体験を話した。聖歌は何回も礼拝の前に練習している。聖餐式では子どもたちが、それこそ赤ちゃんまで陪餐し

ている。それにつられたのか、洗礼を受けていない野田君まで食べていた。礼拝のあとは、教会の牧師館にするつもりだった、今はガレージのような所で昼食。山口君がサックスを吹いて受けていた。「ダグラス・ラブテン司祭の結婚式にはまた来ます。」と言って、教会の婦人たちと別れて帰った。実際ダグラス司祭とは、最初に会った時からそう言っていたので間違いではない。礼拝の始まる前、ネッド司祭が、1999年版のフィリピン聖公会の祈禱書をくれた。グレゴリー教会から1時間あまりで、ホレブハウスの近くまで来たが、ネッド司祭の家で、ビール、コーヒー、コーラなどをいただく。奥さんのグロリアは聖アンデレ神学校の先生。その家が立派なのに驚く。宿舎のホレブハウスに入るが、ミンドロ島グループはまだタガイタイに居るらしい。青年たちを引き連れたリーダーに教区事務所の下のレストランへ連れて行ってもらう。若者が大勢やって来て共に食事をしている。食後も交わりを楽しんでいるが、ミンドロ島グループはまだ帰ってこない。明日のスケジュールについてはアンドレス司祭が伝えてくれる、とのこと。その後、コンビニへ買い物に行き、カップラーメンなども買い込んでくる。湯を沸かしたいのだけれど、管理人に問うと、それは面倒らしいので、結局ネッドのところを訪ねて、ヤカンにたっぷり湯をわかしてもらい、箸まで借りて失礼する。

3月8日（月）

朝8時、〇〇の調子が悪い。どうも昨夜〇〇とボトルをあけたとのこと。キャンプ中だということに何というムチャをすることか、こんな勝手をゆるせるか、など思ったが、結果的には折角の休日である月曜日の観光や買物の間、食事もマトモにできなかったのだから、自業自得ということだろう。教区の車は、ナンバープレートの末尾が1。末尾番号1と2の車は、月曜日には使えない、ということだったが、司祭3人がその格好をして乗っていれば、緊急車両とってくれるから、いいだろう、ということで、それに乗り込み、レオン司祭の車と、2チームで出発。最初に聖餐用具の店に行ってみると移転していてダメ。次にショッピングセンターでサン・パウロ書店に案内された。ここでチャリスを買うとナント8000ペソですばらしいのがある。他のチャリスの2倍くらいの値段。1万6千円余り。教会からもらった餞別2

万円をそれに当てて購入。そのほか、ロザリオを8本、それにキリスト教教育の本を買う。次はマニラ大聖堂。1958年に完成の高くそびえる聖堂で、周りには紫の幟が立っている。大斎節だからだろう。12時10分からミサがあるらしいので、ゆっくり中は見られず、外に出る。昼は、MAX'S という所で私はカレカレなど注文して食べる。食べた後、みんなはサンチャゴ要塞だったが、私はレオン司祭に連れられて、チャイナタウンでマージャンセットを買う。1500ペソを1300まで負けさせたのを、2つ買うからと、1250ペソまで負けさせて、2500ペソ払って、裏が青と緑の色がついたものを買う。そして、ジプニーで帰り、マニラ大聖堂でみんなと再会。ホレブハウスに帰る。帰ってから、昨夜借りたヤカンや箸をネッドの家に返しに行く。その時、大分のトラピスト修道院のクッキーを持参する。私の友人の修道士が焼いているんだ、とパンフレットも渡す。そこで、またコーラをご馳走になり、教区事務所の横の売店などのことを聞く。そして、そこでも面白い本を買って帰る。感謝会に遅れないように行くと、ポテンガン主教の前の、ランピナス主教に会う。そして教区で用意した、日本と九州教区を紹介したプリントを1枚進呈する。感謝会では、「一番フラストレーションがたまったことは何だったか」という質問が私にあたり、「土曜日の夕方、説教の原稿を失ってしまったので、夜の2時まで作り直したこと。」を話した。ラブテン司祭の結婚式には、来たいと思うが、いつになるかわかったものではない、という話で終わった。

3月9日（火）

朝5時起床。6時にホレブハウス1階前で待っていると、アンドレス司祭とホリオさんが来て、荷物を持って教区事務所まで行き、朝食。その前に、以前熊本に居たフレーリー司祭とバッタリ会った。9年ぶりだ。少し痩せていたが元気そうだった。主教が出発前に現れて祈ってくださった。6時45分出発。ホリオさんにどれくらい空港まで時間がかかるか聞いたら、「1時間半くらいかなあ」とのこと。ところが意外と早く、7時30分には空港に着いた。8時45分からの受付と思っていたが、早くチェックインをしてくれた。メンバーの何人かがビールを荷物に入れていたので、預ける荷物にしてくれ、ということだった。どうも空港によって習慣が違って、こ

ちらは戸惑う。特に、預ける荷物と手荷物の英語の単語を知らなかったのが、ちょっと時間がかかった。預ける荷物をカウンターで渡すと、牛島司祭が各550ペソの空港使用料をまとめて払ってくれて、出国手続き。ここでおみやげに、ミンダナオの織物やキーホルダーなど、そして絵葉書やドライマンゴーを買う。絵葉書には、マウンテンプロビンスのサガダやバナウェーの地図のものなどもあって驚いた。ギナーンやマイニット、マリコンまで載っている。25枚くらい買った。飛行機に乗る前の検査では、靴まで脱がされて驚いた。フィリピンから台湾までは順調な飛行で、昼食はブタ肉。台湾では4時間くらい時間があり、免税店で買い物をする者もいる。私はすぐにゲート2まで行って、福岡の佐山さんに電話したところ、福岡空港に藤井東秀さんが迎えに来てくれているとのこと。福岡組はそれで帰れるだろう。時間があったので、私もウーロン茶を買う。46ドルの高級ウーロン茶。そして、台北から福岡行きに乗って2時間の飛行。7時20分に福岡に着いて入国。税関も難なく通って藤井さんが待っていてくれた。留守中、熊本の平野さんが骨折して入院し、手術を受けたことを知る。私が出発する時にはもう怪我をしていたのに、気を遣って知らせなかったのだろうか。明日はロザリオのおみあげを持って、見舞いに行くつもり。秋山さんのお母さんが亡くなったり、山田さんのお母さんが亡くなったりで、本当なら葬式に駆けつけるところを、海外に出かけていて失礼してしまった。それにしても、全員無事に帰ってこられたことが何よりだった。



3月7日、コギオから帰り、教区事務所のカフェテリアで、中央教区の青年たちと夕食

## ミンドロ島グループの行動記録

牛島幹夫司祭

(沖本恭子、山本尚生、和田有加、牛島幹夫司祭)

2日 共通のプログラム

3日 7時15分 教区事務所からホリオの運転の車でバスターミナルへ向かう。

8時 バスセンターからバタンガス行き  
のバス出発11時にバタンガス港へ到着

11時半 レオン司祭と合流。その後、港で昼食

13時40分 船にてバタンガス港を出発。料金、  
一人110ペソ。

16時30分 ミンドロ島ピエル (Pier) の港に到着、  
ここから乗り合いのワゴンタクシーに乗り換えて教会へ向かう。途中  
ミリタリーチェックポイントあり。

17時 カバカオという村のはずれにある  
聖公会の教会に到着。シャーウィン司祭が迎えてくれる。

教会のある場所は田園地帯で田んぼが  
広がっている中にぽつんと教会が立っ  
ている。一番近い家が100メートルは  
離れている。教会から200メートル  
ほど離れたところにある信徒宅で夕  
食。宿泊は男性が教会の礼拝堂。女  
性はその信徒宅ということになった。  
ちなみにこの教会の礼拝堂はUSPG  
からフィリピン聖公会へ送られた  
献金で建てられたとのこと。

4日 7時 朝食 (昨日と同じ信徒宅)

8時過ぎ～ ワーク開始、礼拝堂チャ  
ンセル部分の壁をペンキで白く塗  
る。日本からの参加者4名。シャ  
ーウィン司祭。教会の若い男性メン  
バー3名が作業をする。下塗り  
で壁を白くする。(キャッサバとい  
う芋をかじりながらの作業)

12時 昼食。昨日までと同じ信徒宅で  
ごちそうになる。

13時 午後のワーク開始の予定だ  
ったが、準備していたペンキに不  
具合があり、終了となった。当  
初の予定では、白く下塗りした  
上に、薄緑に塗ることだった。  
しかし白くなった礼拝堂はな  
かなか美しい。礼拝堂を掃  
除してワーク終了。

14時30分 川へ水浴びに行く。ア  
ブラ・デ・イログという名前の  
この地域は乾期でも比較的水が  
豊かである。井戸が方々に掘  
ってあるし。川の水も豊かだ  
った。川では水牛も水浴びを  
している。シャーウィン司祭は、  
「take a bath」と言っていた。  
その通り、みな洗髪をしたり、  
体を洗ったりこの川の中でし  
ていた。

17時30分 昨日とは別の信徒  
宅で夕食をいただく。この家の  
旦那さんはハンターだとのこと。  
家の食堂には、とらえた鹿の  
頭が剥製になってたくさん飾  
ってあった。夕食のおかずは  
全て野菜であった。

19時 教会でビールをごち  
そうになって就寝。女性参加  
者もこの晩から教会で宿泊。

5日 7時 朝食。昨日夕  
食をごちそうしてくれた信徒  
宅より、朝食を届けてもらう。

8時 マンギアンと言われ  
る部族の集落の訪問にでか  
ける。徒歩で約45分。山本  
氏は体調不良のため教会で  
休憩。

9時30分 集落の公民館  
のようなところ(バランガイ  
ホール)で小さな集会。

10時過ぎ 教会へ戻る。

11時30分 昼食。徒歩  
でまた違う信徒宅へ行く。  
ここでは、若い女性、学校  
に行っている子供などもい  
て特に女性の参加者達が  
いろいろと交流を深めて  
いた。

13時 トライシクルに乗りマンブラオの町へ(悪路を約1時間)町で1時間ほど過ごしてから。教会へ戻る。マンブラオの町は西ミンドロ州の州都であり、かなり立派な町であった。大きな漁港がありたくさんの漁船が係留されている。マグロの仲間が取れるようである。マーケットも非常ににぎやかであった。今は使われていないが空港施設もある。

17時 教会のメンバー20名ほどと交流会がもたれた。賛美歌をみんなでたくさん歌った。また、牛島司祭が準備していた説教をする機会が与えられた。交流会の後夕食をいただく。この機会のために一匹山羊をつぶしてくれたそうだ。非常に美味であった。

翌朝が早いとのことで、この日は早めに就寝。

このような交流会が最初の方であった方が、信徒宅におじゃまするときに交流がしやすいと思う、という感想が参加者からあがっていた。しかし、受け入れる側からすると、食事の準備などである程度交わりがあったので最後の交流会に参加しやすかったという面があるかもしれない。

6日 7時 帰りはバスに乗ってピエルの港へ向かう。バタンガスの港までシャーウィン司祭が送ってくれることになった。ほんとに至れり尽くせりである。ピエルの港まで約30分。途中、ミリタリーチェックポイントでは、男性の乗客は全員車の外に出されて、整列をさせられる。人によっては、手を頭の上に乗せられて、ボディチェックを受けていた。その間、マシンガンを持った兵士が3人ほどバスの中にいる女性客をチェ

ックしていた。特に女性の参加者達にとっては恐怖を感じる瞬間であった。テロリストのチェックらしい。7時半頃、港に到着。待ち時間を利用して食堂で、カップラーメンを購入し味見。

8時40分 ピエルの港を出港。行きとは違う会社の船で料金は105ペソ。船の中では映画「ターミネーター3」をやっていたのでそれを見ている間に到着する。行きは3時間近くかかったが帰りは2時間半弱であった。

11時着。

11時 バタンガスの港でレオン司祭に会う。レオン司祭はバタンガスの港の近くに場所を借り、毎週火曜日に港を訪れて訪船活動をされているそうだ。船員への宣教とのことである。ここで、シャーウィン司祭と別れる。港の待ち合わせ場所は実際にはわかりにくかったので、シャーウィン司祭がついてきてくれたことが非常にありがたかった。レオン司祭が九州に来た折りに一人で特急のり間違っで別府で降りてしまった話しを参加者は聞いていたこともあり、「フィリピンの人たちはこれだけやってくれるのに・・・九州教区は？」という声が出ていた。

11時30分 昼食。タール湖で捕れたという魚をツリーハウスのようなレストランで食べる。ヒト(ナマズの種類)が非常に美味であった。

15時 レメリーの教会に到着。教会といっても、信徒が持つビーチハウスのようなところを礼拝の時だけ借りて礼拝を行っている。昨年夏に訪れたあとも、礼拝する場所が二転三転しており今年の1月から今の場所での礼拝をしている。子供達がたくさん集まって来て楽しい一時を過ご

- す。教会は今、新しい土地購入と教会建築の計画を持っているところのこと。台湾の聖ヤコブ教会からの献金を用いるとのことである。
- 15時30分 聖餐式。大人子供会わせて30名ほどであった。まず、歌の練習をしてから礼拝が始まる。このスタイルはどこでも変わらないようだった。礼拝の中では振りのついた歌なども歌われており、レオン司祭も楽しそうに踊っていた。説教を牛島司祭が行った。
- 礼拝終了後、子供達がオチョ-オチョ (otso-otso) と呼ばれる、踊りを見せてくれる。子供達の間でとてもはやっている踊りで腰を8の時に動かすのだそうだ。Otso とは8という意味。
- 17時30分 信徒宅で夕食をごちそうになる。ここでもオチョ-オチョがラジオかなにかでかかっている、3歳ぐらいの小さな子供まで踊っているのに驚く。
- 夕食を終えて、タガイタイのレオン司祭の住む **St. Barnabas** へ向かう。この晩はここで宿泊。
- (\*タガイタイの教会は現在礼拝所を持っておらず、牧師館だけがある状況。土地は既に有しており、礼拝堂等の建物の建設に向けて動いているところ。聖ルカ病院が献金してくれる予定だと言っていた。タガイタイは避暑地となっているため、聖ルカ病院の関係者で週末にタガイタイに来る人も多く、この場所に礼拝する場所を作ることが求められている)
- 7日 8時過ぎ PNPA (フィリピンナショナルポリスアカデミー) へ向けて出発。8時30分頃到着する。牛島司祭はレオン司祭の車にのり、他のメンバーは
- レオン司祭のお連れ合いグローリーの案内でジプニーを乗り継いで行く。
- 9時 聖餐式。ここでも、まず歌の練習があり、それから礼拝をする。式文は英語。40人ほどの集会であった。礼拝の後で交流会を持って頂いた。私たちは、日本語で、「神の国と神の義を」を歌う。PNPAのメンバーは銅鑼を使っての踊りを見せてくれる。非常に難しい。交流会では食事準備された。
- 11時30分 タアル湖を望む展望レストランで食事。ついさっき食事をしたばかりなのに、また食事である。フィリピン人はよく食べる。タガイタイは避暑地で、贅沢な雰囲気のレストランや別荘がたくさんある。
- 14時30分 ベンディッタの伝道所ホーリーイノセントに到着。昨年夏に訪れた時は屋根と柱だけの建物があるだけであったが、今回はその周囲に柵が作られていた。
- 子供達のための教会学校が行われている。先生はカテキストのジマーさん。聖句の暗唱を行っていた。聖餐式が始まるまでに子供達が、椰子の実のジュースをごちそうしてくれる。とても美味だが、美味い！ということになり、山本氏と私は二つも飲まされた。
- 15時 聖餐式、言葉はタガログ語。参加者のほとんどが子供達で、大人は数人であった。子供の親が多いようだった。この地域の人ほとんどは、洗礼の時と、結婚式の時と、お葬式の時だけ教会に行くのだそうです。ここでも牛島司祭が説教をさせてもらう。
- 16時30分 タガイタイのレオン司祭の住まい

に戻る。

17時半過ぎ 再びマニラへ向け出発

19時半過ぎ 教区事務所に到着し、アンドレス司  
祭と会い、夕食。

20時 ホレブハウスに戻る。

8日と9日は、共通プログラム



ミンドロ島グループ 教会の前で記念写真